

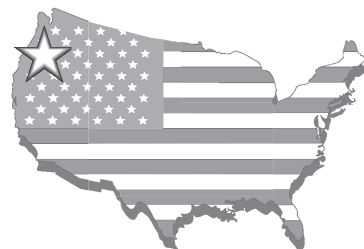


Tokyo, JAPAN

アメリカ留学日記 私の異文化体験記 (4)

早稲田大学文化構想学部 3 年

三浦 礼子



Portland, OR, U.S.A.

2009 年 9 月から 2010 年 6 月まで、オレゴン州ポートランドの Portland State University に留学しています。
このコラムでは、私の留学生としての「異文化体験」を記していきます。

ポートランドでの留学プログラムも、ようやく折り返し地点となりました。この原稿を書かせて頂くのも4度目となりましたが、毎回パソコンに向かいここ最近の数ヶ月間を振り返るたびに時間の経過の早さに驚かされます。

冬休みは留学生のほとんどが旅行三昧。クリスマスや年越しのカウントダウンを、それぞれが思い思いの場所で過ごしたようです。私はというと、クリスマスシーズンはNYで、年越しは姉が日本から遊びに来てくれたので2人でポートランドとお隣の州にあるシアトルへ旅行し羽を伸ばしてきました。

さて、年が明けて新しく冬学期が始まったのもつかの間、気がつけばもう中間試験を終え、さっそく期末試験や最終課題の準備を始める時期です。日本にいた頃は授業も趣味もアルバイトも自分のペースでやってきていたせいか、アメリカでの宿題漬けの生活に初めはだいたいこたえていましたが(もちろん今も勉強は大変に感じますが)、留学期間も半分を切り勉強も遊びも要領をつかんだ今は、この生活が終わってしまうのが惜しくて、毎日をもっと大切に過ごさなくてはとモチベーションも上がっています。

気分一転

年末年始にかけての期間は、冬休みを楽しむのと同時に、私にとっての留学のターニングポイントでした。

まずは新しい寮に引越しをしたこと。これまで同じ留学プログラムの友達のほとんどが同じ寮の同じフロアに住んでいましたが、今住んでいる寮はキャンパス内にあるものの以前の寮からは少し離れているため、毎日顔を会わせていた人ともたまにしか会わないようになり、生活の雰囲気もがらりと変わりました。

そしてこちらにきて初めて、ホームシックとまではいきませんが日本を懐かしく思うようになりました。ひとつの理由は、冬休み中に日本で暮らしている姉が会社の休みを利用してポートランドまで会いに来てくれたこと。幼いころから当たり前のようにそばにいる存在で、離れて暮らすという実感もなく、帰国したらまたすぐ会えるという安心感からかほとんど連絡を取っていませんでしたが、実際に会ってゆっくり話をしたり一緒に時間を過ごしたりすることで改めてお互いの存在の大きさに気付かされました。近くで自分のことを深く理解してくれる家族のありがたさを実感できたことは21年間ずっと実家で暮らしていた私にとってはとても大切なことで、当たり前のことのありがたさに気づけたことにも嬉しく思います。

ただそれが引き金となったのかは分かりませんが、留学が始まってからの3カ月間よりも、今のほうが日本にいる親しい人たちや他の国に留学する仲のいい友達を懐かしむようになりました(笑) 最近、インターネットの電話を使ってカリフォルニアに留学中の親しい友人とよく話をします。お互いうまくいかないことや嬉しい報告など、気心知れた仲なので気兼ねなく話ができ、電話の最後には自然と「まだまだ頑張れる!」という気持ちになります。ストレスなんてたまるわけがない、と意気込んでいましたが、たまに強がらずに弱い部分を見せることも大事だと教えられました。



Conversation Partner のリサと友達と